



写真1 営巣場所遠景



写真2 抱卵中のセイタカシギ 2022. 6. 5 午後



写真3 繁殖行動
手前のオスが地面に胸をおしつける
2022. 5. 22 午後



写真4 オスの飛翔 2022. 5. 22 午後

その他 参考資料

1 改訂レッドリスト 付属説明資料 平成 22 年3月 環境省自然環境局野生生物課 から抜粋

チドリ目 セイタカシギ科

VU(絶滅危惧II類)

セイタカシギ *Himantopus himantopus himantopus*(Linnaeus, 1758)

全長 37cm。脚がきわめて長く、赤色をしていて目立つ。1960 年頃まではごく稀な種であったが、その後の渡来記録は増え、越冬も記録された。1978 年には千葉県で巣卵が発見され、以降は東京湾沿岸地域では繁殖している。現在では北海道から沖縄県まで全国から渡来記録があり、渡来記録も個体数も増加傾向にある。場所によっては 数十羽で越冬しているのを見ることもある。海岸の干潟、湖沼畔、湿地、水田などに生息している。

執筆者:柳澤紀夫(日本鳥類保護連盟)

2 日本動物大百科 3 鳥類 I (1996 年 平凡社) から抜粋

セイタカシギ 学名 *Himantopus himantopus* 背高嶋 black-winged stilt

分布 東京湾岸ぞいの地域を中心に日本には 100 羽前後が生息。世界の温帯、熱帯に広く分布。

サイズ 全長約 32cm 翼長 21~24cm 体重 160~210g

特徴 体の大きさはハトくらいだが、あしが長くずっとスマート、背中と翼はオスが黒色、メスは褐色で、その他の部分は白色、頭部と頸部は白色のものが多いが、オスでは黒色、メスでは褐色の羽毛がいろいろの程度に生える個体もある。尾羽はやや褐色をおびた白色、虹彩色は赤色。くちばしは黒色で、足は赤色

生態 浅い湖沼、干潟のある河口、海岸などに生息し、らん藻類やゴカイ、昆虫、甲殻類、小型の魚などを食べる。一腹卵数 4、雌雄で抱卵。機能上 13 種類の声が区分されるが、敵対行動に関連する声は特に大きい。

育雛期 産卵後 22~23 日でふ化するが、ふ化率は低い。ヒナはふ化後、すぐに巣を出て、水面や泥上の微小な餌を独力でついで食べて始める。

両親はふ化後 2 週目までは頻りに抱雛(ほうすう)をするが給餌は行なわない。ヒナは育雛なわばり内を自由に歩きまわる。両親のほうは絶えずヒナたちの所在を確認していて、外敵の接近に対して親鳥が激しく警戒声を発すると、ヒナはその場にうずくまって外敵をやりすごす。

セイタカシギでは育雛の途中で、メス親の半数が育雛なわばりにオスとヒナを残して姿を消してしまう。このメス親による家族の遺棄は平均するとヒナのふ化後 21 日目に起こる。ヒナの防衛や抱雛など、残った親の育雛の負担が増大するが、残された親が子育てに失敗することはない。ヒナはふ化後およそ 4 週間で飛べるようになる。その後飛翔力が十分そなわると、家族ごとに繁殖地を立ち去っていく。

(北川珠樹)